

マルコによる福音書5章22-23節 「キリストに追いやられる」

1A 地位を得ていた会堂司

1B 敵対していた一人

2B 娘の病

2A 福音の平等化

1B 暴力の平等化

2B 窮地を許される神

3B 全ての人の罪

4B 神のみの栄光

3A 恵みの贈り物

1B ただで受け入れる

2B 対照的な人々

本文

マルコによる福音書5章を開いてください、私たちの聖書の学びはマルコ4章まで来ましたが、午後に5章を一節ずつ見て行きます。今朝は、22-23節に注目します。「**22** **すると、会堂司の一人でヤイロという人が来て、イエスを見るとその足もとにひれ伏して、23** **こう懇願した。「私の小さい娘が死にかけています。娘が救われて生きられるように、どうかおいでになって、娘の上に手を置いてやってください。」**」

1A 地位を得ていた会堂司

イエス様と弟子の一行は今、舟に乗ってカペナウム付近の岸辺に降り立っています。そこに、これまでとは違う人が、群衆に混じってやって来ました。会堂司のヤイロです。彼の娘が、瀕死の病にかかっています。会堂と言えば、イエス様はカペナウムの会堂で、片手がなえている人を安息日に癒されたことを思い出せるでしょうか？その時に、安息日にいかなる治療行為もしてはいけないとしていた、パリサイ派の人たちが怒りました。そしてイエスをどうやったら殺せるか？ということをもヘロデに近いヘロデ党の者たちに相談しにいきましたね。ユダヤ人の宗教指導者は、イエス様が悪霊を追い出したり、病を癒したりするのを、否定することはもはや全できませんでした。けれども、それがサタンから来たものであるとして、イエス様の数多くの証しを退けてしまっていました。

1B 敵対していた一人

会堂司というのは、単に会堂という建物を管理している人ではありません。以前の改訂訳には、会堂管理者という訳でありましたが、2017は「会堂司」と、より正しく訳しています。ユダヤ教においては、長老のような働きをしていて、物理的な管理だけでなく、それ以上に宗教面での管理をし

ていました。ですから、まさにパリサイ派や律法学者と同じ、ユダヤ人宗教指導者の一部とみなしていいです。ですから、彼らがそのようにイエスに対して腹を立てていたのであれば、ヤイロもその仲間であったと容易に、想像できます。

2B 娘の病

しかし、今、自分の愛娘が死に瀕しています。彼女は 12 歳であることが書かれています。当時のユダヤ人の社会では、将来のお嫁さんとして両親同士による許嫁も始まるような年頃です。そのような窮地にあって、これまで反発して、無視してきたイエスという人は、唯一、自分を助けてくる可能性のある人です。そこで、普段は決して目にしない人が、イエス様の前に来て、ひれ伏して懇願しています。ただ触れてくだされば、娘は癒されるかもしれないと思ったのです。

皆さんは、映画パウロをご覧になったでしょうか？そこで、ローマ軍の官僚が出てきます。パウロの牢獄を監視しているところに、医者ルカが来て、彼も捕まえられてしまいました。けれども、彼の娘がどんなに努力しても、病が治りません。ローマの神々に嘆願しても病状は悪くなる一方です。それで、パウロが一言彼に、「ルカは名医だ」と、ルカに診てもらうことを勧めます。今、皇帝ネロが迫害しているキリスト教徒に治療してもらおう？クリスチャンの仲間とみなされる可能性だったあり、危険です。また、ルカはギリシア人であり、ローマ人ではなく、それは自分のプライドを傷つけることでした。それでかたくなに拒みましたが、もう死んでしまうと言う時に、絶望的状态になって、ようやくルカを呼びつけました。それでルカは速やかに診断し、薬を指示して、それを投与、病が治ったという話があります。

もちろん、これは聖書に出てこない話ですが、けれども、まさにヤイロの状況と似ているでしょう。自分個人がイエスに対して、必ずしも敵愾心を持っていないかもしれませんが。けれども、安息日を破るような人は個人的にも信用なりません。そして、自分がイエスに頼んだことが分かれば、ユダヤ人の共同体から追い出される恐れが出て来るでしょう。そしてプライドが許さないというものもあるでしょう。いろいろ、自分の中にある、いわゆる「強さ」がここで崩れていって、他のイエスに近づく人たちと全く同じように、ひれ伏しているのです。

2A 福音の平等化

イエス様に近づくということ、ここには差別がありません。地位の高い人も低い人も、財のある人もない人も、知識のある人もない人も、男も女も、どの国の人も、全く変わりなく、この方の前にひれ伏して、救いを信じて、願い求めなければ、救われることはできません。福音は、人々を全く平等にします。

1B 暴力の平等化

物事には、どんな人も平等にさせるものがありますね。一つ、人が生まれる時です。誰もが裸で

生まれてきます。そして死ぬ時です。だれも財を持ってかの世に持って行くことはできません。ですから、裸で生まれて、裸で土に戻ります。どんな人でも全く同じです。また、水を飲むことについて、それが無ければ生きられないというのもあるでしょう。ですから、どんな人も、大きい人も、小さい人も、力ある人も弱い人も、全てが神の前では平等に造られています。けれども、私たちは人間の生活の中で、社会の中で差別を設けています。それで、神は人の前で全てが同じであることを、忘れてしまうのです。

その時に、神は暴力的なことをお許しになります。かつてはノアの時代、ノアに箱舟を造らせましたが、水によって、地上のものは全て消し去られました。全ての人が、死ななければならなかったのです。暴力と言えば、拳銃もそうでしょう。アメリカでは銃の乱射による事件が跡を絶ちませんが、現実的な話をします。なぜ銃を手放すことができないのか？それは、女性でも、巨漢の男に対して銃は力を持っているからです。どんなに護身術を身に着けても、巨漢の男が襲ってくれば、力において負けてしまいます。けれども、銃というのは力の平等化を行います。誰が持っていたも、その基本操作さえ身に着けていれば、全く互角になれるからです。核兵器もそうでしょう。これも、廃絶してほしいと願うのですが、なぜ北朝鮮が持とうとするのか？イランが持とうとするのか？それは、国の力として核兵器があれば、互角に超大国であるアメリカと渡り歩くことができるようになるからです。力の平等化が起こります。

今、挙げた例は悪いものですが、けれども、主はご自分が再臨されまでの間は、爆弾が投下されるようなことが起こるのをある程度、お許しになられます。それらを是認しては決していません、定められた日に公正に裁かれ、取り除かれます。けれども、そのような災いを無駄にすることなく、ご自分の良き御心を果たすために、お許しになられます。その時に果たそうとされているのは、「福音の前で、全ての人を平等にする」ということです。どんな人も救い主が必要だとする時に、それを悟らせるために、人々の持っている自尊心やプライドを崩すことをさえ許されるのです。ヤイロの場合は、愛娘の病でした。

2B 窮地を許される神

そこで主は、時に私たちを窮地に陥ることをお許しになります。神があらゆる状況を用いて、私たちが否応なしに自分の地位やプライドを捨てて、キリストへと追いやられるようにされることがあります。健康を取られるかもしれません。仕事を取られるかもしれません。自尊心を保たせていたものを、神は取られるかもしれません。そうすることによって、ようやくイエス様のところに行けるようにされます。

ここにおられる、イエス様に出会った経験をされた方々は、何らかの形で、そういった自尊心が取られるご経験をされたと思います。こういった話があります。キリスト教に対してものすごい苦々しい思いを持っていた人がいました。父親が牧師だったそうです。どこかの時点で、そういった権

威に反抗して、チンピラになって、犯罪にも深く手を染めるようになりました。ところが結核になりました。それでみるみるうちに体重が減っていき、がりがりになりました。もう死んでしまおうと思われる時に、ある牧師が呼ばれました。けれども、彼は家族にも会いたがらない、ましてや牧師なんぞに会うことは絶対に拒絶するような人です。けれども、死にかけています。もうそんなことは言ってもらえません。そして、牧師はその人にイエス様を受け入れるように勧めました。彼はこう言いました。「こんな状態でイエス・キリストを受け入れたら、弱虫になってしまう」そうです、自分がこんな惨めな状態になったから、イエスを信じたのだということで、自分をしっかり持っていなかったら、宗教に拠りすがったのだということになってしまう、というのです。そこでその牧師は言いました。「神は、本当にあなたのことを愛しておられるのですよ。あなたの罪を贖うために、御子を遣わされました。あなたのことを、あなたが知っているよりも神はご存じで、それでとても愛しておられるので、このような死に直面するような状況にならないと御名を呼び求められないだろうことを知っておられて、それで今、このようになっているのかもしれませんが。神は愛しておられるから、今、こうなっているのかもしれませんが。」そうしたら、にこっと笑って、「その通りですね。」と答えました。そして、イエス・キリストを自分の罪を救う方として心に受け入れる祈りを捧げました。

主の愛は、あまりにも深く、とてつもなく大きいので、私たちにとってはあまりにも悲劇にしか思えないことさえも起こることを、主は許されて、そしてその人に近づいてくださる方なのです。

3B 全ての人の罪

神は、ご自分の中に、その愛の中に人々を引き入れたいと願っておられます。そのために、全ての人が、どんな人でも差別なく、神に対して罪があることを示しておられます。自分自身がユダヤ人であるパウロは、同胞のユダヤ人に対して、異邦人と等しく神の前に罪ある者であることを論じました。ユダヤ人は二つのことで、誇りを持っていました。それは、自分たちが神に選ばれた特別な民族である、アブラハムの子孫であるということです。そしてもう一つは、律法を持っていました。神の律法があるので、それがなく滅びるしかない異邦人と違い、自分たちは救われると思っていました。けれども、パウロは彼ら自身も律法を持っているだけで、それを守り行っていないから、異邦人と同じように割礼を受けていないのと同じようにみなされる、つまり救われているのではなく、失われているのだと論じました。そして、こう言っています。「ロマ 3:9-12 では、どうなのでしょう。私たちにすぐれているところはあるのでしょうか。全くありません。私たちがすでに指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も、すべての人が罪の下にあるからです。次のように書いてあるからです。『義人はいない。一人もない。悟る者はいない。神を求める者はいない。すべての者が離れて行き、だれもかれも無用の者となった。善を行う者はいない。だれ一人いない。』誰も彼もが、罪を犯しています。

そして、「3:19 それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。」と言いました。使徒ヨハネは、黙示録でこのことを幻の中で見ました。「20:11-12 また私は、大きな

白い御座と、そこに着いておられる方を見た。地と天はその御前から逃げ去り、跡形もなくなった。また私は、死んだ人々が大きい者も小さい者も御座の前に立っているのを見た。数々の書物が開かれた。書物がもう一つ開かれたが、それはいのちの書であった。死んだ者たちは、これらの書物に書かれていることにしたが、自分の行いに応じてさばかれた。」大きい者も小さい者も、だれも差別なく、神の大きな裁きの座に出て、自分の行いについて、神の書物に、書かれてあることにしたがって、裁かれます。

ここまで、神は徹底しておられます。えこひいきされる方ではありません。どんな地位も、力も、魅力も、どんなものも、神に印象操作することは一切できないのです。しかし、裁きが徹底しているということは、恵みも徹底しているのです。全て人が神のさばきに服するのですから、神の恵みも、全ての信じる人に、分け隔てなく与えられるのです。「ロマ 3:22-24 すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。そこに差別はありません。すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです。」全ての人々が、ただ恵みによって、イエス・キリストの贖いによって、価なしに義と認められるのです。

福音は、このように人々を平等にし、人々を一つにします。パウロは、キリストにあってどんな人も一つになることを大胆に宣言しました。「ガラ 3:27-28 キリストにつくバプテスマを受けたあなたがたはみな、キリストを着たのです。ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」例えば、もし会社の部下が信仰を持っている人で、彼の教会にたまたま上司が導かれて、イエス様を信じたとします。部下は信仰的に成熟した人で、人に御言葉を教えることができる人でした。部下の聖書のクラスに、上司が来て、それで教えを受ける、ということがあったらどうでしょうか？十分にあり得る話です。実はローマ社会では、上司や部下の関係ではなく、もっと上下関係、いや主従関係になっていた、主人と奴隷の関係がありました。奴隷がキリスト者となり、その奴隷の身分の者が牧者や教師になることもあったのです。そこに主人が信仰をもって、奴隷が主人を教え導くこともあったのです。全ての人々が、キリストにあって一つだからです。

4B 神のみの栄光

神は、なぜこのように人々をキリストにあって一つにされるのか？それは、誰もが栄光を取らず、ただおひとり、神だけが栄光を受けるためであります。バプテスマのヨハネのことを預言したイザヤが、福音の前での人々のことを、山や谷が平らになることによって表現しました。「40:3-5 荒野で叫ぶ者の声がする。『【主】の道を用意せよ。荒れ地で私たちの神のために、大路をまっすぐにせよ。すべての谷は引き上げられ、すべての山や丘は低くなる。曲がったところはまっすぐになり、険しい地は平らになる。このようにして【主】の栄光が現されると、すべての肉なる者がともにこれを見る。まことに【主】の御口が語られる。』」山の人、つまり、地位の高い人も、神の前では罪人に

なり低められます。谷の人、つまり地位の低い人、取るに足りない人は、神に愛され、選ばれ、神の相続人となるという恵みを受けています。そうやって高められます。そうすることで、人々が平らにされるのです。その目的は、主の栄光が現わされるためです。高い所があれば、そこに栄光がいき、人々が注目します。低い所があれば、人々は見向きもせず、さげすみます。けれども、平らになることによって、全ての人が誰も見ることなく、神の栄光を見るのです。

3A 恵みの贈り物

1B ただで受け入れる

ここで大事なのは、ただで受け取ることです。神の恵みによって、価なしに、義と認められると、先ほどありましたね。黙示録には、最後に「22:17 渇く者は来なさい。いのちの水が欲しい者は、ただで受けなさい。」とあります。神は、恵みをもって私たちを救ってくださいますが、その恵みが恵みとなるためには、私たちも代価を払わないで、恵みをもって受け入れることです。無償で与えまうと言っているのに、「いいえ、私が払わないと、気が済みません。」として対価を払うのは、そこで自分の自尊心や権利を保つことができるから、そうしているのです。恵みを受け入れるということは、そうした自尊心や誇りを捨てなければ、感謝の思いをもって受け取ることができません。

イザヤは、ただで与えると言っているのに、労して命を得ようとしていることの虚しさを預言しています。「55:1-2 ああ、渇いている者はみな、水を求めて出て来るがよい。金のない者も。さあ、穀物を買って食べよ。さあ、金を払わないで、穀物を買え。代価を払わないで、ぶどう酒と乳を。なぜ、あなたがたは、食糧にもならないもののために金を払い、腹を満たさないもののために労するのか。わたしによく聞き従い、良いものを食べよ。そうすれば、あなたがたは脂肪で元気づく。」イスラエル人が、願いをかなえてもらうために、わざわざ外国まで行き、そこにある神々にいけにえを捧げにいこうなことをしていました(57:9-10)。目の前に恵みがあり、目の前に無償で受けられる命があるのに、労して、命のない者のところに行くのは何なのか？と問いかけているのです。高いお金をかけて、例えばアメリカのラスベガスにまで行き、ギャンブルをしても、そのスリルを持続させることはできるのですか？それよりも、キリストにある満たしは無償なのに、そこに自分を明け渡せないのですか？というようなものです。

2B 対照的な人々

最後に、本文に戻りますと、会堂司のヤイロの願いを聞いて、彼の家に行こうとしたところ、途中で長血を患う女がイエス様の衣の房を掴んだことを、お話ししたいと思います。律法によれば、女性の月のものは、不浄の期間と言われ、彼女が触るものはすべて汚れたものと儀式的にみなされるので、半ば家の中で隔離されます。出産の時の悪露も同じです。けれども、もし不正出血が続いたのであれば、その人は恒常的に人の前に出て来ることはできず、人々から疎外されています。けれども群衆の中に紛れ込んで、イエス様の衣に触り、それで出血が止まりました。その間に、

なんとヤイロの娘は死んでしまったのです。イエス様は、「5:36 恐れなくて、ただ信じていなさい。」と言われました。そして、死んだ娘をイエス様は起き上がらせたのです。

とても対照的な二人です。一人は、ユダヤ人の社会で地位を持っていた会堂司の娘です。もう一人は、人々から引き離されていたユダヤ人の女です。しかし、イエス様はどちらにも癒しを与え、命を与えられました。その恵みには、分け隔てがありませんでした。ヨハネの福音書にも似たような話があります。ユダヤ人の指導者で、パリサイ派であったニコデモが、夜に独りでイエス様のところに行き、「3:2 神がともにおられなければ、あなたがなさっているこのようなしるしは、だれも行うことができません。」と言ったのですが、イエス様は、「3:3 人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」と言われました。ニコデモは、そのままでは神の国に入ることはできなかったのです。ところが、その次にサマリアの女の話があります。イエス様のほうから、サマリアに入られます。そして井戸の傍らで腰を下ろされ、彼から水を汲みに来た女に声をかけられます。そして、ご自身の与える水は、内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出ると約束されました。ここでも、主は高い者を低くされ、低い者を高くされました。

イエス様の前にひざまずいたヤイロを思ってください。ご自身の中に、何がイエス様のところに行くのを妨げているのでしょうか？その高くなっている部分は何でしょうか？また、長血を患う女も思ってみましょう。自分に必要があるのに、自分はイエス様の恵みを受けられないとっていないのでしょうか？そこから抜け出して、ぜひイエス様に近づいてください。